ある戦士の墓標

ある戦士の墓標　3　世界

じょうじ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16003638

ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ダイの大冒険, ダイ大小説50users入り

原作終了後設定です。未読の方ご注意ください。
オリキャラいます。捏造もりもり入っています。ダイレオの匂わせがあります。ヒュンケルもマァムも原作とは違った感じになっています（それぞれ８年後こんな感じになってたらいいなという私の願望が入っています）

１〜５ページが本編で６ページ目がお礼と反省文、７、８ページがささやかなおまけです。

実は鬼岩城結婚式に合わせてこの３をアップするつもりだったのですが、書いている途中でヒュンケルのイメージが変わってしまい、結局全部書き直しました。

１のキャプションに書いていた「恋愛に程遠かった環境で育ってるのに、なんで愛を語ってるんだろう」は「愛と恋を６０日間で履修した男」「マァムに関してはえらいストイックな男」に変化しました。
あと「こじらせてる」って言ってごめん。私もこじらせてた。

お待ちいただいていた方、本当にありがとうございました。読み辛いところが多々あるかと思いますが、ご容赦ください。

読んでくださった方の暇つぶしになれれば幸いです。

※前回までのブクマ、コメント、いいねありがとうございました！
モチベーションの源になっています。

誤字脱字を修正し、自分用メモを削除しました。（2022/04/21）

ある戦士の墓標　3　世界

季節は狂いなくめぐる。
マァムは孤児院に来てからこの村を出ることがめったにないが、豊かな四季は彼女に様々な景観を運んできてくれる。

教会の窓から丘を見ると、夏のはじめに駆け回って遊んでいた野原を、少し背の伸びた子供達がザクザクと鳴る霜柱を夢中で踏んでいる。
去年とどこか違いながらも、繰り返される八度目の光景にマァムは笑みを浮かべた。

そして手元の一通の封書に視線を落とす。
宛名はこの孤児院だが、差出人の名はない。マァムは一度その筆跡を人差し指でなぞり、それからペーパーナイフの刃を封に滑らせた。

中から出てきたのは一枚の手紙と一葉のしおりだ。
この手紙としおりの封書が届くのは初めてではない。差出人の名のない封書に最初こそ訝（いぶか）しんだものの、アバン先生に似ながらも力強く、それでいてどこか繊細なその字を見たときから、マァムには兄弟子の手によるものだろうと見当がついていた。差出人名を記さないのは、きっと彼なりの理由があるのだろう。

手紙には冒頭にリクシーの名前と三行の簡単な文章が大きな字で書いてある。あの兄弟子がこの子供向けの文章を考えている様子を想像して、マァムはつい頬を緩めてしまった。
そして封筒に手紙だけを再び入れた。

一方しおりには、大人向けのタッチで赤いゼラニウムの絵が描かれている。そして裏面の余白の隅に小さく『魂はともにある』と書かれていた。
そのメッセージで、マァムはこれは自分宛なのだと知る。

でも彼はきっと知らないのだろう。
赤いゼラニウムの持つ花言葉を。
そのハーブとしての効能から、故郷の庭先でも育てていたほどありふれたその花の意味は『君ありて幸福』

そして彼はまた知らないのだろう。
余白に添えられたこの一言が、どれほど自分にとって嬉しいものなのか。
自分のやってきたことが兄弟子に認められたように思えて、まるで宝物のように感じていることを。

その一方でしおりを胸に押しあてながら、マァムは思う。
こんなはずでは、なかった。

諦めると決めた自分のための愛に、夏はまだ胸を焦がすことがあるかもしれない。
けれど秋には受け入れているかもしれない。
そして冬にはもう痛みはなくなり、胸の奥でひっそりと思い出になるだろう。

そして次の春には別の何かに、例えば友情とか信頼とか、名前はなんでもいいから、暖かくて柔らかな別の絆に生まれ変わって芽吹いてくれたらいい。

そう願っていたのに、この一葉がそれを許してくれない。

届けられたしおりはいつしか花束のようになり、マァムの机の引き出しに大切にしまわれたまま。移りゆく季節にあわせたような花々と、そこ添えられる兄弟子の筆跡のメッセージは変わらずにただそこにある。

巡りゆく季節と、変わることなく留まりつづける感情の間で、マァムは揺れている。
そして、思索の海で溺れてたまたま息継ぎができたときふと思う。

ただ、会いたい、と。

北の大地に粉雪が舞う。
触れれば溶けるだけの雪が降りゆく様はひたすらに美しいが、それを運ぶ風はひどく冷たい。
この日その風を十分に凌げる洞穴を見つけることができたのは、
ヒュンケルとラーハルト、それにドラゴンにとっても幸運だった。

「情報はあったか？」

野営の準備を終え、ドラゴンの世話をしていたラーハルトは、近くの村落での情報収集から帰ってきたヒュンケルに声をかけた。ヒュンケルはいや、と返事をすると分厚い外套のフードを脱いだ。

最近この辺境の森で警備隊には手に負えない魔物の集団が出ているので退治してほしいという依頼が来たのは二日前のこと。
その依頼に白羽の矢が立ったのがラーハルトとヒュンケルだった。

戦力としてはどちらか一人でも十分だと思っているが、対象範囲が広大な森なのでヒュンケルだけでは時間がかかるだろうし、ラーハルトとしてもダイの傍らから離れたくないから早く帰れるなら人手があったほうがよかった。

そんなふうに二人で魔物討伐にでるようになってもう八年になる。
毎度ただ淡々と仕事を終わらせるだけだったが、ヒュンケルが任務の合間に手紙を書く姿をラーハルトが見るようになってしばらく経つ。

ラーハルトに詮索する気はないが、それは春の終わりにヒュンケルが半魔の子どもを拾ってからなので、彼はその手紙は子ども宛なのだろうと思っていた。
焚火の前に座って懐から紙と携帯用の筆を取り出し、それを走らせ始めたヒュンケルにラーハルトはわずかに口端をあげた。

「筆まめだったんだな」
「アバンに言われた。折につけて連絡してやれと。自分は妻にそれをしていなかったら後悔していると」

リクシーを孤児院に送り届けたその足で、ヒュンケルは報告と礼を——それは孤児院の紹介とかつて自分を育ててくれた分を合わせて——兼ねてカールを訪れた。
ヒュンケルはマァムとのことを特に何も言わなかったが、師は何かを察したらしかった。ただ、静かに懇願するようにこんなことを口にした。

「これはアドバイスでも、まして教えでもなく、私からのお願いです。どうか時折連絡をしてあげてください。
私は肝心なときにそれを怠りました。だからフローラはカールの滅亡時に私がいないことで私が死んだのだと思いました。わかりますか？私は彼女が一番辛いときに、追い打ちをかけてしまった。
だからあなたには私の過ちをさせたくないし、彼女（・・）には妻と同じ思いをさせないでほしい」

手紙を出すことを、ヒュンケルは最初は躊躇した。
なぜならそれまでに彼が彼女に書いた唯一の手紙は、「すごく引きずっている」と言わせてしまった別れの置手紙だったのだから。

それでも筆を執ったのは幼子に約束したからと、マァムに伝えたい想いがあったからだ。

便箋と封筒を購入した雑貨屋で、それらの隣にあった花のしおりに目がいったのは偶然だった。
それを見たらひなげしの咲く野原で笑う彼女を思い出した。
自分からの手紙をマァムは嫌がるかもしれない、せめて慰めになるようにと、気がついたらそれを購入していた。
それに「しおりは枝折（しおり）、森で道に迷ったときの道標にな

る」と師が言っていたのも思い出した。彼女が自分の道を進むための道標になればいい、そんなことを考えた。

けれど結局マァムにはしおりに短くメッセージを書くことしかできなかった。それは確かにヒュンケルの伝えたい想いではあったが。差出人名も記さなかった。これはもしこの手紙が自分への復讐を企てる人物の手に渡ることを考えて、というのが理由だが、もし自分の名前があれば読まずに捨てられるのでは、という思いもどこかにあった。

「・・・お前、そんな目で見ていたのか？」
「？」

突然の相方の凍りついた声にヒュンケルが筆を止めて顔をあげると、ラーハルトは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

「お前の性癖に口を出すつもりはないが、当然待ってやるんだろうな？」
「待てばどうにかなるとは思っていない」
「正気か？子どもだぞ」
「おまえにはマァムが子どもに見えるのか？」
「マァム？」

ラーハルトの毒気を抜かれたような表情に、ヒュンケルは彼が何か勘違いしていたことと、ついでに自分が言わなくてもいいことを口走ってしまったことに気がついた。

「おまえたち結婚していたのか・・・おめでとう」
「・・・・・・・」

ドラゴンの世話を終えたラーハルトは焚き火の前に座ると、木の棒で薪をつついた。気持ち寂しそうに見えた。が、ふと何か思い出したようにヒュンケルへ顔を向けた。

「いや、数年前あの女が結婚したと聞いて、おまえ珍しく酔っ払っていたな。もしかして道ならぬ恋か？」

プライベートに口を出すつもりはないが、倫理的に引っかかるものに関しては気になるらしい。
このまま放置していい勘違いでもないので、ヒュンケルは説明することにした。

「万が一オレが結婚することがあったら、さすがにおまえには報告する。オレは結婚していないし、マァムも独身だ。以前見つけた子供を預けにいっただろう？その孤児院の院長がマァムだったんだ」
「そのときにそういう仲になったのか」
「ちがう。正直に言うと、昔恋仲だったことはあった。だがすぐに別れた。ついでに言うと子どもを預けに行ったときに振られた」

ラーハルトはヒュンケルの告白に驚いたようではあったが、他方彼の性癖については安心したのがありありと見てとれた。

「それは残念だったな。だがあの容姿ならさすがにもう別の男はいるか」
「いや、そういう理由ではなく、孤児院に集中するためだ」
「それはおかしくないか？」

ラーハルトは首をひねる。別の男がいるとか、ヒュンケルを好きでないとかいう理由なら納得できる。だが孤児院と恋愛はどちらかを選択せねばならないものではない。

「おまえと恋仲になれば孤児院経営が傾くわけであるまい。なぜ両方手に入れようとしない？」
「それだけ彼女が必死だということだ。責任感の強い女性だから、生命を預かるということに真摯に向き合っているのだと思う」

ヒュンケルは再び視線を落として、再び筆を走らせる。その横顔にいつもと変わった所はない。
ラーハルトにはヒュンケルの物わかりの良さが腑に落ちなかった。それに好きな女のことを、それも断られたという話を、まるで雨が降っているというのと同じように淡々とするのも理解できない。

（人間同士の愛というのは淡白なのものなのか？）

ラーハルトがそんな思いを持ったのは、彼が知る愛が自分の両親の種族的を超えた激しいものであり、バランとその奥方の文字通り命懸けの愛だったからだ。それに比べると、目の前の男の反応はあまりにも薄すぎる。
だから静かな湖畔に小石を投げ入れるような気分で口にした。

「攫ってしまえ」

三割ほどは本気だった。
ラーハルトにとってマァムは、勝利のためにその生命を犠牲にすることもやむなしと判断したこともある、その程度の存在だ。目の前の友の幸せと彼女の意志は天秤にかけるまでもなく前者が圧倒的に勝る。

ヒュンケルは再び筆を止めると、目だけでラーハルトに微笑んだ。
驚きも否定もしないところを見ると、ヒュンケルもそう考えたこと

はあるのだろうと思った。

「最期の一瞬まで正義の意志を貫くとマァムに誓った。自分の欲望のために女性を拐かすことはそれを否定することになる」

ぱちり、と焚べていた薪が爆ぜ、火の粉が舞いながら組んでいた薪の形が崩れていく。

「それにオレは現状に満足している」

ヒュンケルは目を伏せた。
自分が幸福だと思えたのは、実のところこの一、二年のことだ。

マァムから去ったことを後悔したことはなかったが、それでも心が引き裂かれるような痛みは常にあった。彼女が結婚したと聞いたときは嫉妬の炎に心を妬かれた。それから開放されたのは、結婚の話を聞いてから 2 年ほど過ぎたよく晴れた日だった。

その日、街中で目の前をマァムと同じくらいの背丈の女性が通り過ぎた。彼女は寝ている赤ん坊を抱いていた。もし結婚して程なく子どもに恵まれていたら、あれくらいになるだろうかと考えたら自然と目が追っていた。
しばらくして赤子が目を覚まし、母親に笑いかけた。その笑顔に目眩がした。

理屈も義理も理解しているわけはないのに、母親に向ける笑顔には無条件の信頼があった。
それを見てこの笑顔を得たのなら、マァムはもう自分の知らぬ地で

知らぬ家族と幸福なのだろうと思った。

ならばマァムと彼女が愛する存在を守ることができるなら、もうそれでいいではないか。
幸い自分にはその力がある。
彼女に誓った正義の意志を貫くことが、そのまま彼女の幸福を守ることになる。

ならばもうそれでいい。

いつしか戦いの目的が贖罪だけではなくなった。
愛する女性が幸福に暮らすこの世界を守れることを誇れるようになった。

そしてこの世界で微笑むマァムの姿を思い描くだけで心に暖かな光が灯った。それが自分にとっての幸福だと知った。

なのにその姿をこの目で見ることができた。
その上今も愛していると伝えることができた。
もう、これで充分だ。

ラーハルトはそんなヒュンケルの顔を静かに見つめた。一見穏やかに見えるその表情に諦念とも達観ともとれるものを感じとった。
それはラーハルトにとって、歯がゆいものだった。
無二の友人が、彼の手から人生の美しい部分を滑り落ちていくのを

黙って眺めている、それを見ているような気分だった。
心中で嘆息すると、彼はヒュンケルを見据えた。

「自己欺瞞だ」

ラーハルトの言葉にヒュンケルが視線をあげると、真摯な眼差しで自分を見つめる友がいた。

「正義の意志を貫くとやらが真実であることは見ていればわかる。だが現状に満足しているのは嘘だろう。そうでなければ子どもを預けに行ったときに振られたという話もないはずだ」

おまえはもっと幸福を求めていい。
そう口にしてもこいつには逆効果であることがわかる程には、長い付き合いになった。

「もしおまえがあの女の助けになりたいと思っているなら、手紙などではなく会いに行ってやれ。この先何かあっても顔も見れない兄弟子には、頼りにくいだろう」

この男は自らの幸福を望まない。
だが大切な者の幸福のためなら死力を尽くす。
だからこの男にはこれくらいの言い方がちょうどいい。

「・・・そうだな」

しばしの逡巡の末、ヒュンケルは書いていた手紙を火に焚べた。

手紙は一瞬舞う炎となり、すぐに灰に転じた。

炎に照らし出された横顔からは、ラーハルトには何の感情も、まして未来などは読み取れない。

あまりに見つめすぎていたのか、ふとヒュンケルが振り向き、目だけで笑った。

「ありがとう、ラーハルト。おまえのおかげで行く決心がついた。だが少し怖い。マァムをまた泣かせてしまうのではないかと思えてしまってな」

人間が魔族の世界、それも魔王軍に身を置くことがどれほどのことなのか。それをわずかにでも想像できるのは自分かもしれない、とラーハルトは思う。

だから願わずにはいられない。
養父への愛ゆえにそれを自ら選び、そこから戦い抜いてきたこの男の未来が、美しく優しいものであることを。

満ちた月が天に昇り、
小さな村の聖堂に慈しみ深き光が降る。

ステンドグラス越しに届く月光はとてもやわらかで、白い息を吐きながら跪き、祈りを捧げるマァムの心を穏やかに包んでくれる。

兄弟子が発った日以降、マァムは子供達が寝静まったあとで、時折ここを訪れるようになっていた。
そしてそれはいつも月夜だった。月夜でなければいけなかった。
太陽の光は明るすぎて、ときには人には知られたくないことも白日の下に晒してしまう。

だからマァムの誰にも告げることのできない揺れる気持ちを考えるとき、それはいつも月の光の下だった。

目を閉じて、心を見つめる。
自分はどうすればいいのだろう。
・・・ううん、そうじゃない。
そもそも自分はどうしたい（・・・・・）のか。

ぎぎ、と扉が開く微かな音に、マァムは閉じていた目を開いた。緊張が走る。目を開いても月の光が照らすのはほんの一部だけで、音の主を視認することはできなかった。呼吸音でさえこだましそうな聖堂に密やかに響く軍靴に似た足音。それを不審者と判断したマァムがランタンの灯りを吹き消し、足さばきのためにスカートの裾を捲りあげたところで、靴音は止まった。

はっきりと見えるわけではない。ただ薄闇の中で見上げたその背格好の輪郭が会いたいと思っていた人のもののように思えた。

「ヒュンケル？」
「ああ。こんな時間に何かあったのか？」

立ち上がりながら聞こえた、低く空気を揺らす声。それは間違いなく兄弟子のものだった。
それでも八年ぶりに現れたときと同じように突然現れた彼を、マァムは幻ではないかと思ってしまう。
半年以上リクシーに会いにこなかった彼が、どうして突然また現れたのか。もしかしたら変身呪文（モシャス）で化けた偽物かもしれない。

「ううん。それよりあれ（・・）ありがとう。彼（・）も喜んでいたわ」
「手紙が無事に届いたならよかった。リクシーにはまだ難しかったか？」

カマをかけようとしたマァムが肩透かしをくらったように思えたくらい、彼の返事は期待通りで普通だった。
やっぱり、本人だ、と思うと気が抜けた。でもどこか夢を見ているような気持ちだった。それでも声を潜めながら返事をした。

「まだ読めないけど、とても喜んでいたわ」
「・・・おまえは？」
「え？」
「おまえ宛にしおりも同封していたが、迷惑だっただろうか？」
「嬉しかった。しおりもメッセージも。ありがとう」
「・・・そうか」

薄闇の中で、安堵したような気配があった。

それでようやくマァムの胸にもぬくもりが宿る。
机の中に仕舞われたしおりの花束を早く手に取って抱きしめたい。
その気持ちを気取られぬよう、一度こっそり深呼吸をする。そして火の消えたランタンを持ち上げた。

「客室をすぐに準備するわ。明日の朝、リクシーがあなたを見てどんな顔をするか楽しみね」
「いや、客室はいらない。大聖堂はいつでも入れると聞いたが、朝までいてもいいだろうか」
「だめよ。ここは今からもっと冷えるわ」
「問題ない。ここが落ち着く」

マァムは戸惑ってしまった。たしかに大聖堂は誰がいつでも神様に助けを求められるように、施錠はしないからいることには問題はない。

でも落ち着く？兄弟子と大聖堂はあっていないようであっているというか、不思議としっくり来るのだけど、本人が落ち着くという感覚を持っているのは意外だった。
予想外の言葉にマァムが戸惑っているうちに、兄弟子は椅子に腰掛けてしまった。

「地底魔城に似ている。いや、気を悪くしないで欲しい。おまえと出会ったときのではなく、オレが幼かったときの地底魔城だ」
「場所が違うの？」
「同じだが、あのころは養父がいて、養父の仲間がいた。ここにはおまえや子どもたちや村の人々の温かな気持ちがある」
「ああ、そういうことね」

マァムには彼の意図することがなんとなくわかった。
人々にとっては魔王軍の本拠地であった地底魔城も、彼にとっては愛し愛された幼年時代の記憶が詰まった温かな故郷なのだ。

「たしかにここはパプニカの大礼拝堂みたいな荘厳な祈りの場、という感じではないわね。みんなが気軽にお祈りにくるから、日常のぬくもりがあると思うわ」

コクリと頷いた兄弟子は穏やかで、でも少し寂しそうに見えた。だから寄り添いたいと思った。けれどマァムは彼へ近づくことができなかった。

あの夜、彼の思いを無駄にしたのは他ならぬ自分だった。そんな自分が彼の傍にいたいと思うのは、無神経だと思えた。

客室の準備だけして帰ろうとしたとき、焚き火の煙の臭いとぬくもりに包まれた。兄弟子が着ていた外套を脱ぎ、マァムをくるんだのだ。無言で行われたその動作は、ここにいていいと言っているようで、マァムの申し訳ない気持ちごと暖かく包んでくれた。

「私ももう少しここにいてもいい？」
「もちろん」

ためらいがちな声に彼が返してくれた声の力強さに、マァムはやっぱりこの人が好きだ、と思った。

二人並んで座る夜の聖堂は不思議な空間だった。
白い息を吐くくらい寒いのにヒュンケルの隣は暖かくて、静かなのに自分の鼓動でうるさい。
昔何度も二人で夜を過ごしたのに、今はどの夜よりも穏やかで、どこかそわそわしてしまう。

落ち着きたくて、マァムはそっと目を閉じた。すると鼻を煙の臭いがつんと刺激する。北の大地特有の樹木の枝を焚べたときの臭いだ。重くて厚い外套に染み込んだそれで、きっとヒュンケルはここに来るまでどこか寒い所で野営をしていたのだろうと思った。

「随分寒い所に行ってたみたいね」
「オーザムの南の森だ」
「遠いわね。ルーラで送ってもらったの？」
「いや、ラーハルトにドラゴンで送ってもらった」
「ドラゴンで？時間がかかったでしょう」
「時間はかかるが、あれはあれでなかなかいい」
「どんな感じなの？」
「そうだな・・・気に入っているのは地上の灯りだ。空が暗くなっていくにつれ地上では徐々に灯りが点り、数時間すると今度は次第に消えていく。その光自体も綺麗だが、人々の一日の終わりの憩いの光だと思うと、さらに美しいと思う」

薄闇の中でマァムの瞳が潤み僅かにきらめく。
出会った頃からとても強い人だったけれど、それは彼が傷つかない精神の持ち主という意味ではなかった。むしろその強さを奮うこと

で犯してしまった罪がずっと心を占めていた。

その彼の心が人々の生活の灯火を美しいと感じている。
それが嬉しかった。

「他には？ヒュンケルが美しいって思ってるもの、知りたいわ」

おとぎ話の続きをねだる子供のようなマァムにヒュンケルは目元を緩めた。

「花も美しいと思う」
「お花？」
「薬草と毒草しか名前はわからないが、華やかに高く咲いて人の心を彩るものもあれば、子供の背丈に合わせて咲くものもある。手折って髪に挿すのも美しいだろうと思う」
「なら・・・今度は春に来て。ここはとても綺麗よ。リクシーも花冠の作り方を覚えると思うの。きっとあなたに作りたがるわ」

次に会える約束が欲しかった。
きっとすぐにリクシーに会いに来ると思っていたヒュンケルは季節が二度変わっても来なかった。だからまた次の季節に来ると彼に言ってほしかった。

「あなたも子供達が遊ぶ丘を見たでしょう？冬が終わればいろんな花が咲き始めるの。・・・でももしかして男の人は花冠は恥ずかしい？」

沈黙したままのヒュンケルをマァムは見上げた。

そして、ちがう、と思った。

闇に慣れ始めた目にもまだはっきりとは彼の表情はわからない。けれどヒュンケルが口を閉ざしたままな理由はわかった。

ヒュンケルが美しいと言う世界に、彼が入ることを彼自身が許していない。

マァムが察したことを否定も肯定もせず、ヒュンケルは困ったように笑うだけだった。

「花冠はお前にふさわしい」
「じゃあ私が被るからあなたにも見てほしい」
「マァム」

肩から滑り落ちそうになった外套をヒュンケルが手に取り、マァムをくるみ直して彼女の手で押さえさせた。

「世界の美しさや優しさに気づかせてくれたのはお前だ。それを守れる力をくれたのもお前だ。だからお前にはその世界で笑っていてほしい。
それがオレの幸福だ」

「それでも、」

マァムは外套を直してくれた手に時分の手を重ねる。いつも自分よ

りも暖かかった手が、今は氷のように冷たい。

一度息を吸い、天窓を見上げた。
そこにはめられたステンドグラスは罪の赦しを願った題材だ。その
モチーフが月の光を受けて暗闇の中で優しく浮かんでいる。

月は――私のわがままを赦してくれるだろうか。
わからないけど、ずっと我慢してきた言葉が零れゆくのをもう止め
ることができない。

「私はあなたに傍にいてほしい」

それはマァムが絶対に伝えてはいけないと思っていた言葉。

出会ったころから、強くて、孤独なこの人に一人でどこかへ行って
ほしくなかった。
けれどそれを口にすることはできなかった。
平和のために。仲間のために。戦うために。勝利のために。未来の
ために。

ましてや罪を背負いながらも正義の道を歩むこの人を絶対に止めて
はいけない。

ずっとそう思っていたマァムが自ら禁じていた『自分のための愛』
の言葉だった。

ヒュンケルを見上げると、彼は驚いた表情をしていた。

自分の行く道を邪魔をする我儘な女だと呆れたかもしれない。
一度自分の気持ちを無駄にしておいてと怒るかもしれない。

でも私にはあなたが必要なのだ。
魂だけじゃなく、声もぬくもりも、あなたをまるごと欲しい。

「私はもう十六歳の力が強いだけの女の子じゃない。私を必要としてくれる存在がいっぱいある。だから私はもう私だけのものじゃない。
だけどあなたが傍にいてくれるなら、私があげられるものは何でもあげる」

マァムは自分を包んでいた外套を、ヒュンケルの肩にかけた。もう充分に温めてもらった。その熱を今度は彼に返したい。

「何がいい？」

聖堂に静寂と時間だけが流れる。
それでもマァムは待った。
答えによっては、彼に生き方を変えさせてしまう、そうわかっていたから。

天窓から差し込まれる月の光がその角度を変えた、と思ったときに、ようやくヒュンケルが口を開いた。

「一秒・・・いや一瞬でもいい」
「うん」
「おまえの眼差しがほしい」
「うん」

おずおずと両手を伸ばして彼の頬にそっと触れる。
それはちょうど春のあの夜、自分は幸せだと言った彼の言葉が真実か確かめたときのように。

ヒュンケルは彼の時だけが止まっているかのように動かない。
けれど、その瞳が一瞬きらめいて、マァムはそこに自分を見つけた。

「ヒュンケル、あなたの瞳の中に私がいるわ。
私、いま、あなたの世界を独り占めしてる」

そしてきっと彼も見ているはずだ。
彼しか映していない私の瞳を。
いまこの時だけは、私の世界に彼しかいないことを。

「好きよ、ヒュンケル」

一度溢れた想いはもう止めようがなかった。
けれどその想いを受け止めたヒュンケルの顔が歪んだ。

「マァム」

「うん」
「だめだ」
「うん、じゃあ、次は何がほしい？」
「オレはこれ以上幸福を望んではいけない」

頬に触れている手のひらを熱いものが伝い、流れおちていく。
自分の幸福を望めず、人の幸福を守るこのひとのことが、私はこの先もずっと好きなのだろう。

「ヒュンケル。もっと私を見て。
今あなたの見てる世界には私しかいない。地上の灯りも花も月も神様も、綺麗なものは何もないけど、あなたが何を望んでもうんっていう私だけいる。

だから今は何を望んでもいいのよ」

それを咎める存在は、二人きりの世界にはない。
指先に感じる、頬を流れゆく涙は止まらない。
それでも彼は答えてくれた。

「マァム・・・」
「うん」
「愛している」
「うん、じゃあ、全部あげるね」

彼の目に映る世界の全てを差し出す。

マァムは両手をヒュンケルの首に回して、体ごと顔を寄せた。

ゆっくりと自分の背中に太い腕が回され、躊躇いがちに抱き寄せられる。
ぬくもりに安堵すると同時に、ぞわりと嫌な想像に襲われて、マァムはヒュンケルに縋り付くように彼の外套を握りしめた。

——八年前に突然去られた傷は癒えない。
だからどうしても、そんな未来も想像してしまう。

正義のために戦い続ける彼の世界は、これからより美しく、より深く、広がっていく。
そこで別の目的や人を見つけるかもしれない。
そのとき、彼はまた去っていくかもしれない。

だけどもう我儘は言わない。
彼の旅立ちを邪魔しない。
そして私も歩みを止めない。
もう私を必要としてくれる存在がたくさんある。
少女のように泣いて立ち止まってはいけない。

そのときに私がちゃんと一人で歩けるよう、
彼の魂の強さを私に移して去ってほしいから。

「お願い、傍にいる間はぎゅっとしてて」

覚悟をしたつもりなのに、声に涙が混じってしまった。
情けないのと怖いので体が震えてしまう。

けれどヒュンケルは苦しいくらいに抱きしめてくれることで返事をしてくれた。

「マァム」
「うん」
「・・・ありがとう」
「わたしこそ、ありがとう」

そして、ごめんなさい。
あなたの生き方を変えさせてしまった。

それでも私は、あなたが欲しい。

パプニカの王都より南南西へ馬車で３日ほど行ったところに、その小さな村はある。
小さな村とはいっても、良質の土を産しかつては煉瓦の生産地として栄えていたため、王都への道はその運搬のために石畳で舗装され、戦火を免れた古い建物が多いために、村の景観は小規模な古都という印象だ。

僕がこの村にやってきたのは、三百年前の大魔王バーンとの戦いで活躍したと言われるアバンの使徒のうち、ヒュンケルについての卒論の調査のためだ。彼を卒論のテーマに選んだのは、まあ、男のロマンゆえ。そして今、かなり後悔している。

アバンの使徒のうち、もっとも研究が進んでいるのはパプニカの中興の祖でもある正義の使徒レオナ。戦火で多くの記録が消失したとはいえ、王女として生まれだけあって残された記録は多い。

次に研究が進んでいるのは勇気の使徒ポップ。彼は平民の生まれだけど、魔法使いにとっては「アバンの書」よりも有用とされる「ポップの書」を遺しているから、それが研究の中心となる。

それから慈愛の使徒マァム。彼女は大戦後まもなくこの村の僧侶として任命されて、晩年までこの地で司教として勤め上げた。だから彼女の研究は教会の記録を検証することになる。

そして純粋の使徒ダイと闘志の使徒ヒュンケルは同率で研究が進んでいない。

純粋の使徒ダイは資料がない。生まれから一切ない。本当にこの地上にいたのかと勘繰りたくなるくらいない。のちに女王レオナの王配になった男性の若い頃の姿が彼だと主張する研究者もいるけえど、推測の域をでない。

闘志の使徒ヒュンケルは逆に資料がありすぎる。ただしどれも公式の記録じゃなくて、民間伝承だ。どうやら彼は大戦後に各地を巡っていたらしく、その時の逸話がその地に残っていったらしい。興味深いのは比較的初期と思われる伝承は彼に対して批判的なものが多くて、後期になるにつれ好意的になっていく点だ。

話が逸れたけど、ヒュンケルの研究はとにかく民間伝承を集めて、その真偽を確認するというとんでもなく手間のかかる作業だ。
僕がこの村を訪れたのはもしかしたら使徒マァムの資料の中に何かかするものがあるのではと期待してだ。なぜなら比較的信頼度が高いとされる資料の中で、「闇の中にいた闘志の使徒ヒュンケルは慈愛の使徒マァムの光に救われた」という記述があったからだ。

僕がその村の教会前に着いたとき、すでにそこには司教が立っていた。

「はじめまして。突然申し訳ありません」
「いえいえ、お待ちしておりましたよ。使徒マァムの関連資料をご覧になりたいのでしたね」

さあこちらへ、と早速案内しようとしてくれた若い司教に僕は持ってきた花束を差し出した。

「拝見する前に使徒マァムの墓前に備えたいのですがよろしいでしょうか？」

この村が王都から馬車で三日かかっていたのは昔のこと。今はすでにインフラとなっている気球で一日で来れるので、王都の花屋で買ったものが持ってこれるのだ。

司教は目を丸くして驚いていたが、すぐに顔を曇らせた。

「残念ですが、使徒マァムの名が記された墓はないのです」
「そうなんですか・・・」
「ですがこれは頂いてもいいですか？」
「もちろんです」

僕の返事に司教は微笑んでくれた。

それから司教はいろいろな資料を見せてくれたけど、結論から言うと有益なものはなかった。
結局僕は手ぶらのまま、夕方には教会を出発することになった。

「本当にお泊りにならなくてよいのですか？」

「はい。この村から王都への次の気球が出るのは来週と聞きましたので。今日中に隣村まで行って、そこから朝一の気球で王都に戻ります」

司教は驚いたようで、目をまん丸くした。
さっきも思ったけど、この司教はすごいきれいな顔立ちだけど、驚いて目を丸くした途端幼く見えてなんかかわいい。

「お急ぎなのですね」
「急ぎではないのですが、家族が待っているので早く帰りたいんです」

その言葉に、なぜか司教はふにゃりと笑った。
そして懐から何やら取り出すと、ぽん、と手のひらに何か茶色のものを置かれた。

「キャラメルですよ。このあたりでは『マァムの瞳』っていわれてるんですけどね」

僕は馬車に揺られながら、キャラメルを口にした。甘くて、ちょっとしょっぱくて、疲れが溶けていくようだ。御者が前を向いたまま話しかけてきた。

「何か収穫はありましたか？」

「残念ながら。でもとてもいい村ですね。『マァムの瞳』も美味しいし」

がっかりするぐらい収穫はなかった。
わかったのはこの村にはなぜかピンクの髪と灰色の髪の村人が多いこと。あと『マァムの瞳』は甘くてちょっぴり塩気があって、とても美味しいということ。

御者はおや、と振り返った。

「それ司教様にもらいましたか。気に入られましたね」
「そうなんですかねえ」
「じゃあ、色々聞けたんじゃないですか、マァム様のこと」
「え？」
「あの方、小さい頃マァム様に育てられたらしいですよ」
「えええ！」
「気が付きませんでしたか？あの方、魔族とのハーフですよ。もう三百才越えてるんですって」
「ええええええ！」

世界が茜色に染まる頃、司教は王都からの花束を手に教会の裏の丘の頂上を目指した。
中腹まで来ると、いったん歩みを止め、今きた道を振り返った。

初めてここに来たのは三百年も前のことだ。
大きな手につかまるようにしてやってきたこの場所は暖かくて、同じくらいの年の遊び相手もいて楽しかった。だけどふとした拍子に母を思い出した。悲しくて涙が我慢できなくなったときに、優しい

女性が抱き上げてくれた。
そのとき、誰かが「リクシーのおとうさんがいるよ」と指さした。

その指の先に、まだ若かった養父が立っていた。
もう随分昔のことだが、その顔は今も鮮明に覚えている。幼かったからその表情を描写する言葉を持たなかったけれど、養父がこの優しくて強い女の人のことが好きで好きでたまらないのだということだけは子供心にもすごくよくわかった。

丘の上には、目印のように立つナラの大木の木漏れ日の中で、名のない墓標が二つ並んでいる。

養父がいかなる人であったかを知ったのは、彼が他界した後だった。
小さな村の僧侶の伴侶として生きた養父には咎人としての過去があった。思えば彼が墓標に名を刻むことを頑なに拒んでいたのは、この地に自身の名前があることで、この村が憎悪の対象になるのを恐れていたからなのだろう。

だから彼の名前は形としては残らなかったが、この胸には彼の人生が遺っている。

たとえば村の自慢のステンドグラスの光が射し込む大聖堂で行われた夫婦の始まりの儀式を。

花冠を被った新婦の眩しいくらいの笑顔を養父は泣きそうな顔で見つめていた。

たとえば産屋から漏れるうめき声に、微動だにせずに耐えていた養父が、闇を引き裂くような産声に流した涙を。
幸運なことにそれは何度か繰り返された。

たとえば慈しみ育てた子供たちが巣立っていった日の青空を。
彼らのうち何人かは数年後に伴侶とともに村に戻ってきて、新しい生命を迎えた。

そして永訣の朝。
ある日、なかなか寝室から出てこない二人を心配した孫が彼らを様子を見に行くと、二人はベッドの中で幸せそうに永遠の眠りについていた。

敬愛する二人を一度に亡くした家族や村人の嘆きは深かった。
けれど指輪をしたまま重なりあったしわくちゃの手を見て、自分はほんの少しだけ救われた。そういう約束があると、以前一度だけ養父に聞いたことがあったから。

司教は手にした花束を片方に供えようとしたが、少し考えて、結局花束を二つに分けて両方に供えた。
彼女のことになると、見かけに反してとてもとても嫉妬深い人だった。他の男からの花束を彼女にだけ供えるなんてとんでもない。

それから懐から小さな箱を取り出し、中身を二人に一つずつ供えた。さっき学生にも渡した「マァムの瞳」だ。

そういえばキャラメルのことを「マァムの瞳」と最初に言ったのは養父だった。その理由を聞くと「色が似ていて甘くて蕩けそうだから」と真顔で言ってのけて、その場にいた皆を悶絶させた。

それを思い出したとき、一方の墓に供えられた花の一輪がもげた。

「まさかあの人にあげたこと怒ってるの？」

司教は驚いて目をまん丸くした。まったくこの人はしょうがない。
彼女が甘く蕩けるような瞳で見つめていたのは養父だけで、養父もそのことは十分わかっていたはずなのに。
司教はため息をついた。

「まあ、司教のオレがこう言うのもなんだけどね、大丈夫だよ、とうさん」

そして二つ並んだ名のない墓標を愛おしげに見つめる。

「大好き同士の二人を、神様だって邪魔できなかっただろ？」

季節はちょうどひなげしの頃。
暁の色をそのままその身に移したような花の頭を薫風が優しく揺らし、菫色の夕闇がそっとそれを包んでいく。

その戦士はその名を刻んだ墓標を残さなかった。

けれど彼が幸福に生きた証が、この世界には今も息づいている。

長くてしんどいお話を読んで頂いて、ありがとうございました！
お時間、労力を頂いて、感謝ばかりです。

書きたかったのはちょっと大人になったマァムさん。虫唾が走るほどいい子ちゃんが、好きなものを好きって言えてるといいな。

それから赦されていくヒュンケルとマァムが大好きすぎるヒュンケル。原作で禊は済んだようにも見えますが、彼は引っ張ってそう。

あと血の繋がらない親子について。顔は似なくても表情や喋り方が似てるといいなと思います。
でも恋との両立が難しい。
あと見ようによっては子供をダシにしちゃったように見えるかもしれません。そう見えたら、私の力のなさです。マァムもヒュンケルも子供たちを慈しんでると思います。

ちなみにリクシーの名前は、アニメの２期エンディングのアーティストさんの綴りにを、iとlをごっちゃにして入れ替えて、強引に読んでつけました。そんな読み方はできないと思いますが（笑）

お口直しにおまけを書きました。
短くて軽いお話です。本編がステーキだとしたら、おまけはサラダ味の煎餅とオリーブオイルが足りないカプレーゼです。

ステーキの余韻がお好きな方は、ここで止められたほうがいいかと思います。

サラダ味の煎餅、オリーブオイルが足りないカプレーゼが気になる方は、どうぞ次のページにお進みください。

ありがとうございました！

抜けるような青空の下、洗濯ロープに干された真っ白なシーツと甘い恋の色の髪で作られたポニーテールが風にふわりふわりと揺れる。

今日はとても天気がいいから、きっと午前中にこの洗いたてのシーツも乾きそうだ。でも取り込むのは少し待ってもいいかもしれない。そうすればシーツにおひさまの匂いと暖かさが染み込んで、遠くからくるあの人が幸せな気分になれるかもしれないから。

そう、今日は恋人が来る日なのだ。

村長様が彼にとお酒を届けてくれた。アンナさんもそれに合うチーズを持ってきてくれた。他にも彼が来るならと、いろんな人がいろんなものを持ってきてくれる（正直料理には自信がないので、とてもありがたい）

このみなさんからの差し入れは、彼が来るたびに村のみんなに配ってまわるお土産が効いているのだと思う。

実はちょっと前に彼は悩んでいた。
自分は村の皆に嫌われているらしいと。どうやら村の飲み会に呼ばれてその場で、「思うだけじゃなく、いいかげん形にしろ」と怒られたらしい。言ってた本人は酔っ払っていたけど、みんなウンウン頷いていたらしいので、どうやらこれは村のみんなの総意らしい。

「この村の方々には本当によくしてもらって、感謝している。しかし形とはどういうことだ？」
「そうねえ。あ、もしかしてお土産かも！」

ということで、彼は毎度お土産を配るようになった。ただ扱いは変わらず、居心地のよさは以前のままらしい。それもそうよね、だってあの人たちは見返りを求めて何かをする人たちじゃないから。
きっとお酒の席の冗談だったのだろう。

風がびゅうと吹いて、マァムは空を見上げた。
そして白い雲に混じってドラゴンが飛んでいないかと探した。もしかしたら風が追い風になって早く着くかもと期待してしまうのだ。けれど空には流れゆく雲だけで、着くのはやっぱり夜かなあとしょんぼりしてしまうのだった。

✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳

村のみなさんはヒュンマ応援団というお話
ラーハルトはいまずもがな

春の陽に立つ市の色彩は、人の心を浮きたたせる。
蛹が蝶へ羽化するがごとく、人々は落ち着いた色の冬服を脱ぎ捨て、軽やかな色合いの服へ袖を通す。
そこに色とりどりの花々や旬の果物や野菜が並び、視覚だけでなく嗅覚や味覚も刺激するのだ。浮かれるなと言う方が無理だろう。

市を歩いていた一人の男が小さな荷車の前で足を止めた。
灰色のフードの下からのぞく瞳が、その荷車に載せられた何種もの花が捉えたからだ。名を知るものは一つとしてなかった。だがその花々はどれも愛らしく、少し癖のあるピンク色の髪に挿すのに似つかわしく思えた。

男は微かに口角を上げたが、すぐにまた歩を進めた。
脳裏に浮かんだのは８年も前の、まだ少女のと言って差し支えない笑顔だ。人の妻になったと聞いて久しい。既に母親になっていても不思議ではない。きっと容貌は変わっているのだろう。空想の中であっても、思い描けない顔に花を捧げることが男にはできなかった。

そこそこ大きな地方都市に月に二度だけ立つこの市は、荷車の数も多く観光客も多い。おかげでこの町の者ではない人間が何を買っても誰も気にもとめない。

燐寸を購入しようと煙草屋を覗くと、椅子に腰掛けていた主が隣の

乾物屋の主とこちらに気づかぬまま話をしていた。

「ちょっと前に町長が国に東の森に魔物退治を要請しただろ？あれ、昨日来たらしいぜ。誰が来たか聞いたか？やべーぞ」
「ああ。人間のくせに魔王軍にいたやつだろ？毒を以って毒を制す、ってやつだな。めちゃくちゃ強えんだろ？大丈夫かね、オレたち」
「今のところは問題ないんだとよ。でも町長が一番ビビってるぜ。普通国からの派遣っつたら、役場の前の一番高いホテルに泊まらせるだろ？今回は町外れのあのばあさんの宿屋だとよ」
「うわあ。ばあさん貧乏くじ引いたな。ばあさん気が弱えからなあ」

煙管の隣に燐寸を見つけたとき、不安定な足どりで砂を踏む小さな音がした。
そちらに目を向けると一つぐらいの小さな男の子がこちらに向かって歩いていた。転ぶな、と思ったとき、案の定転んで膝をついた。
だが男の子は四つん這いのまま泣きもせず、ただびっくりして動けないだけのようだった。

男がその子供を助けようと跪いたとき、灰色のマントに鞘がひっかかった。手を伸ばしたとき、おそらく母親のであろう叫び声が聞こえた。

「にげなさい！！！」

転んだことよりも、母親の剣幕に怯えた男の子の口がへの字に曲げられ、みるみるうちに目に涙が溜まり、やがて泣き声とともに頬を流れ落ちていく。

目の前で必死な形相の母親が子どもを抱きかかえ、去っていくのを男はただ見ていることしかできなかった。

「子供が自分で転んだだけじゃねーか」
「感じわりーな。にいちゃん気にすんなよ」

煙草屋と乾物屋の主はそれぞれそう声をかけると、すぐに別の話題に夢中になった。

違う、と男は心の中で呟いた。
母親の判断は正しい。あの男の子は彼女が大切に慈しみ育てている生命だ。ちょうどかつて魔王軍にいた男が町に来ていると噂がたっているときに、不審な男が目の前にいたのだ。彼女はその生命を守ろうとしただけ。当然の選択だ。

叫び声に、周囲が若干ざわついている。

男は踵を返した。足りないものはまだあるが、宿屋の女将に買取らせてもらうように頼めば済む。

宿屋に戻ると、入り口の花壇で赤い花が揺れていた。
男はその花の名前がひなげしであると知っていた。ケシ科でありながら毒にも薬にもならない役立たずだと、覚えていたのだ。

けれどその役立たずのはずの小さな花が、男の心をわずかに温めた。

その色が彼女の魂の色に似ていたから。

✴✴✴✴✴✴✴✴✴✴✴✴

任務を終えた男が、再び宿屋に戻って来たのは市が立った日から７日あとのことだった。
普通より多めに金貨を渡そうとした男に、宿屋の老いた女将はおずおずと尋ねた。

「あの、森の中に母子が居ませんでしたか？」
「いや、見ていない。迷子か？」
「いいえ。その、昔から、私が小さい頃から、あの森には魔族の女性が住んでいまして・・・。いい魔族なんです。森で迷ったら町まで送り届けてくれるような。それで、６年くらい前に旅の男と一緒になって・・・。しばらくして子どもが生まれたんですけど、男は病気で亡くなったんです」
「その母子が今も森に住んでいると？」
「はい。でも、それがその、母親も一年ほど前に病になりまして・・・かなり苦しそうだったので、どうしてるのかなあと思うのですが、ちょうど魔物が出てきて、見にも行けなくて」
「町の警備隊には伝えたのか？」
「はい。ただ、警備隊の仕事は人間を守ることだと」
「・・・わかった。探してくる。家はわかるか？」

女将が言った通りのところに小さな荒屋があった。
男が中に入ると寝台に女が横になっていた。その隣には小さな男の子が寝息を立てている。
女の方は——間に合わなかった。

もしもう少し早く気がついていたなら。
叫びたくなるような苦しみをこらえて、男は男の子を抱き上げた。
今度はそうすることに躊躇いはなかった。
慈しまれた生命を受け止めるような気持ちで抱き上げた体は、温かく柔らかかった。
やや唇が割れてはいるものの、目を閉じた顔は穏やかで、胸に何かがこみ上げてきた。

そしてふと思った。
これがもし彼女の子どもであったなら、この胸に湧き上がるのはどんな感情であろうかと。
きっと愛せるだろう。しかしそれは愛おしいという言葉で足りるのだろうか。

そのとき男の子が目をゆっくりと開いた。
そして目が合い、寝ぼけたような声が聞こえた。

「とうさん」

その言葉に永遠に得られない家族の幻を見た。
けれど彼女の表情も子どものそれも見えなかった。
見えなかったのに、その不確かな残像が心に焼きついてしまった。

「どうしてないてるの？」

幼子の声に、男はその子を抱きしめることしかできなかった。

翌日男はこの町を出発することにした。
その左手には幼い子どもの手と繋がれていた。
魔族の血が流れる親のないこの子が、この町で生きるのは難しいと判断していた。

男には連れて行く先に心当たりがあった。
この幼き生命を預けるのは、信頼できる者でなければいけない。すると自ずと行き先は決まった。
自分を恨んでいるかもしれないが、この子のことは受け入れてくれる。そういう女性だ。
もし叶うなら、幸福に暮らしている姿をひと目見たい。そんなふうにも少し思った。

来たときよりも荷物が二つ増えていた。
一つは宿屋の女将が用意してくてた子供の服一式。もう一つはお菓子やらおもちゃやらが入っている巾着。これは市で転んだあの子どもの母親が届けてくれたらしい。
そしてなぜか煙草屋と乾物屋の主がいた。昨日のうちに母親の埋葬をしてくれていた。

馬車を待ちながら、男の子が男に問うた。

「いまからどこいくの？」
「教会だ」
「かあさんはいる？」
「いや、かあさんはそこにはいない。だがお前を守ってくれる人がいる」
「こわいところじゃない？」

男は男の子の頭を撫でた。

人間は確かに弱い。けれど助け合うこともできる。
だから、親を失った半魔の子どもでも生きていける場所があるのだ。
そう、世界は思うよりずっと美しく優しい。
自分は決してそこに足を踏み入れることはできないが、その入り口まで送り届けることはできる。

「心配するな。お前はそこで幸福になれる」

やがて馬車が来て、二人は乗り込んだ。
馬が嘶き歩き出すのを、ひなげしはそっと見送った。

✴✴✴✴✴✴✴✴
ひなげしの花言葉には「いたわり」「思いやり」「恋の予感」などがあるそうです。